

ヤナギの間種と野麦峠のアザミ

奥原 弘人 (松本市大村 565)

Hiroto Okuhara: Notes on some species of *Salix* and *Cirsium* in
Nagawamura, Nagano Prefecture

1996年8月7日、猛暑を避けて奈川温泉に滞在中、散策に出て付近の黒川渡部落の河原に見馴れないヤナギのあるのに気付いた。結局これはイヌコリヤナギとオノエヤナギとの雑種イケノヤナギであると判定した。この雑種は前に上高地と坂北村でも見ているが、この度見たのは河原で適地であるためか小枝の生長がよく葉も多少長めであったので多少迷ったのであった。

この小枝を採って10本ほどを挿木した。その年は生存するだけであったが、翌春になると活動を始めた。その多くは花序をのばしたが、花が終ると、そのまま生長が止まったように見えたので引抜いて捨てた。残った2本は新枝を出して生長を続け、その1本は初夏の頃は高さ40cmほどになったが、その葉は全部対生しイヌコリヤナギの形質となった。

その時虫害を受けて生長点を失ったところ上部から横に枝を出して生長を続け長さ25cmほどになったが、その下部10cmほどでは葉は擬互生の形をとり、それから上では互生となった。そこで切りとって標本とした。他の1本の葉序は下部の10cmほどが擬互生となり、それから上は全部互生となった。葉の形は何れもイヌコリヤナギの形に近い。以上のように葉序が両親の形質を現している面白い。

イケノヤナギを見つけた翌8月8日、5kmほど上流の神谷部落の川岸でネコヤナギとイヌコリヤナギとの雑種と見られるものを見つけた。若枝の先端についている若葉は紅色でイヌコリヤナギの形質を現している。成葉は互生していて長さ5～8cm、幅16～

25mmの長楕円形で円～心脚、円頭、微細な鋸歯をもち、裏面は粉白色をおびていて美しく、葉脈はネコヤナギに似ていて、半円形の托葉がついている。若枝には毛があるがネコヤナギほどではない。下部の枝には稀に葉の対生する小枝がある。ここにはネコヤナギが列生していてイヌコリヤナギが混っている。以上の点から、これはネコヤナギとイヌコリヤナギとの雑種であると考えられる。

この雑種について杉本検索誌には「*S. x hatsusimai* Kimura チクゼンヤナギ間種 (ネコヤナギ×コリヤナギ又はイヌコリヤナギ) 九州の河畔」とある。これによればネコヤナギ×コリヤナギもネコヤナギ×イヌコリヤナギも同じ種名になっているが寡聞のためか、このような例を知らない。

そこで2、3の研究機関に質問することにした。すると間もなく東北大学で柳の研究を行っているという大学院生の東隆行氏から次のような回答をいただいた。「ネコヤナギとイヌコリヤナギの雑種の件ですが御存知のとおり、チクゼンヤナギ (*Salix hatsusimai* Kimura) というヤナギがあり、これは木村有香博士が1935年に東北大学理学部紀要10巻3号で発表しています。それによると、このヤナギはネコヤナギとコリヤナギまたはネコヤナギとイヌコリヤナギの雑種ということになっています。しかしコリヤナギ、イヌコリヤナギのいずれかについては記載されていません。また木村博士は後に(1940年)先に植雑40号に発表した *Salix thymasta* をネコヤナギとコリヤナギの雑種として発表しています(東北大紀要15巻4号)が、この際にチクゼンヤナギについてのコメントはありません。

んでした。」とある。

これによればネコヤナギ×コリヤナギは *S. thymasta* であることが判然となる。するとネコヤナギ×イヌコリヤナギは *S. hatsusimai* チクゼンヤナギということになりそうである。それによれば九州で発見されたチクゼンヤナギがこの信州にもあることが分かった。

松田行雄氏が長谷戸台で採った柳の標本が信州大学の標本室にある。これは葉の長さ4～6cm, 幅6～7mmと小さくて細長く, 基部と先端が鈍形で, 裏面に毛があることからみてネコヤナギとコゴメヤナギとの雑種であると考えられる。そこで地名により仮にトダイヤナギとし, 更に現地での観察を行いたい。

野麦峠のアザミ

長野県側から野麦峠(海拔1672m)を越える県道は先年自動車の通行可能な新道に付け変えられ, 大きく迂回して尾根と谷を横切って上ることになった。

その途中では至る所に大型のアザミが群生しているのが見られる。この山地は位置からみてノリクラアザミの分布域とみられる。1990年9月9日に採った標本を見るとマルバノリクラアザミ, スギモトアザミの他にウスジロノリクラアザミとした綿毛の少ないものがある。

これを確認しようと知人の好意で少し念入りに採集したのは1997年8月28日であった。薄暗い林内で種を判定することはやめ, 適当な所で車を止めて採集し, 標本とした。

その標本を見るとマルバノリクラアザミは海拔1600mの地点での採品だけで, 他の1350, 1490, 1580, 1650mでの採品は何れも綿毛が少くて先にウスジロノリクラアザミとしたもの(丸葉形)ばかりである。

このようなものは未だ報告されていないようであり, 和名をつければマルバウスジロノリクラアザミとなろう。

このようなものの分布は北隣の黒川の上流が推定されるが, 道のない, この地の調査は

困難であろう。

先年出版した「信州の珍しい植物」にこれをナンブアザミとノリクラアザミとの間種としてあるが, この高地にナンブアザミは皆無であるから, この見解は誤であることを知った。

スギモトアザミを間種とする説もあるが(「長野県植物誌」等), 同様の理由によってこれを旧種とするには問題があるということには先に本誌でも述べてある。

むしろノリクラ→スギモト(品種)ウスジロ→ノリクラ(変種)とする見方は如何なものだろうか。



イケヤナギの葉序(奈川村黒川渡, 1997年8月18日)